平塚に住んで そして 今は

造形作家　藤田 昭子さん

横浜国立大学美術科卒業。ブラジル、カンピーナス大学美術学部造形教育学科教授、女子美術大学大学院教授。50年以上に渡り造形作家として活躍。日本国内にとどまらず、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ブラジルなどでも数多くの講演、プレゼンテーションを行う。国内外で個展、グループ展も多数開催し、土による“自然”“生きもの”をモチーフにした作品を発表している。平塚市内では、1976年に巨大モニュメント「出縄」を制作。その後も世界各地で野外彫刻作品を制作してきた。2004年には自身の作家活動の軌跡を記した著書『思索集―藤田昭子の原風景―』を出版。また、波の子造形研究所を設立して50年余り、3才児からの造形教育研究、「遊びの造形」を中心に教育活動も続けている。

子供のころ、その少女時代に見た記憶の中で、敗戦後（第二次世界大戦）の風景は、忘れることが出来ない。

何もない大地には、今では考えられもしない風景が見えていた―。そこには、焼け野原に、人達が自分たちの住み家を建てたり―空き地には野菜をつくっていたこと、そのエネルギー、その生き様は、たくましく、私にとって忘れられない“原風景”となっていった。

私は18才の頃に、絵を描き始めて、横浜国立大学美術科へ入学した。そこで、小関利雄教授の指導に出会い、私の暗い闇から・・・少女時代から―開放されていった。

それは、私自身が生まれ変わり、沈んでいた暗い心がだんだんに解放されていく瞬間だったのだろうか。

それは造形指導の中で“空（から）になる”ということであり、積み込まれている雑多なものが消えて、「0（ゼロ）」点になっていくことだった。

私は、その教えを受けながら、お手伝いをしながら、造形教室を開くことになった―。

この指導の原点を、私の人生の活動としてみたいと思った。子供から大人も、いや、凡（すべ）ての人々の中で「作っていく」という原点を指導していきたいと思ったのである。

私自身が自由になり、この「制作する」ということを学んでから、もう50年を過ぎてしまった。

私は「土」という素材をえらび、「土」をさわりながら、息をしている様に作っていく。「土」は私の指の先から、生き物の様にあふれ、「形」となった。

「出縄」にて　波の子造形研究所の生徒たちと

「牀座」（2002年）　森の中、大地に座する捧げ物の台をイメージし制作した作品

私のまわりにいる多くの人々の姿や、人たちの群は、制作されていくうちに人々の住む住居となり、そして都市へとイメージは展開していった。

1976年、77年の頃、私の夢はふくらみ、画廊での個展から飛び出して、大地の「イメージ」へと変わっていった。

平塚と大磯の境にある「出縄」が、制作地に決定した。

多くの若い人達の協力で、凡（すべ）て初めての技法で、野外彫刻を制作していく。焼成についても初めての技法で、大地に制作された「土」の造形を野焼きという方法で開拓していった。

約2年間の月日は、試行錯誤もあったが、長い長い夢は、その果てのように実現していった―。

私が、土の作家としてえらんだこの制作の原点は「戦後の風景」と重なっていたのだろうか。

その後、日本ばかりでなく世界の各地で、野外彫刻を制作しながら走りまわった日々である。